

心の輪を広げる体験作文 中学生部門 佳作

「偏見のない世の中はつくられるのか」

相模原市立上溝中学校 三年 大泉 凜

おおいずみ りん

「やばい、きもい、変。」

私は、姉という時このような偏見の言葉を聞いています。私の姉は知的障がい者です。突然泣いたり、突然怒ったり自分の気持ちを上手くコントロールできない事がとても多いです。しかし、そんな障がいをもった人は周りの偏見があっても文句を絶対に言いません。なぜなら、分からないからです。偏見をもった人はそれを良いことに心ないことをたくさん言います。私も障がいを持った姉がいるから悔しさがあります。偏見を持ったり、自分と違う人を傷つけてしまう前に、自分の兄弟や家族、あるいは自分だったらと考えるべきだと思います。そうすれば、そのように周りに言われるのがどれだけ傷つくのか分かります。

障がいを持っている人たちは生まれ持った自分の体で一生けん命大人になって、皆と同じように、仕事をしたり誰かのために働いています。わたしたちはそんな人たちに偏見の目をむけるのではなく支え合うべきだと思います。一人一人個人差があっても皆同じです。皆が支え合いながら偏見のない世の中に、一人一人が生き生きと生活できる世の中にしていけたら、偏見という言葉もなくなると思います。